研究ノート

高校における近現代史教育の試み

安達宏昭

はじめに

立教中学校は二〇〇〇年四月から立教池袋中学校・高等学校に改編され、池袋校地にも高等学校が新設された。私は昨年度、第一回生である高校二年生の日本史A・世界史A（四単位）を担当し、世界史と日本史を統合した近現代史のみを扱う授業を行うことができた。しかも、一学年のクラス編成が三クラス（各クラス四三～四四名）なので、私一人で一学年全てのクラスを担当したため、内容の構成や授業の方法などで、さまざまな試みを実施することができた。本稿は、この高校での一年間にわたる近現代史教育の授業実践について報告することを目的としている。[1]

実践を報告する前に、この授業の枠組みとなる中学社会科、高校地歴・公民科のカリキュラムとその内容について紹介したい。[2] 立教中学校社会科では、高校を開設するにあたって表1のようなカリキュラムを設定した。この際に、高校地歴科においては近現代史のみを必修で取り扱うことに決めた。そして、この方針を実現するために、近現代に重点を置いた日本史A（二単位）と世界史A（二単位）を同一学年に配置し、実際は分野をわけずに一科目の近現代史として実施することにしたのである。

社会科が、高校で近現代史学習のみを必修科目として設置したのは、以下の理由に依っている。第一に、近現代史教育がきわめて重要であると考えたためである。社会科では、国際化が進むなかで、世界の人々とともに福祉と平和に貢献できる人物を育成していくためには、まず二〇世紀に日本がアジアおよび世界で行った事実を知ることが不可欠と考えてきた。このため、ここ数年、戦争体験を聴く機会を設けるなど特別プログラムを実施してきたが、[3] 今回、必修科目の内容そのものにそれを反映させたのである。第

表１　2002年度　立教池袋中学校・高等学校
社会科・地歴科・公民科のカリキュラム*1

	必修(時間・単位)	必修選択(時間・単位)	自由選択などの選択
中１	地理　３時間	なし	選科*2　２時間
中２	歴史　３時間	なし	選科　４時間
中３	公民　３時間	なし	選科　４時間
高１	倫理　２単位 政経　２単位	なし	なし
高２	日本史Ａ　２単位 世界史Ａ　２単位	地理Ａ　２単位*3	なし
高３		現代社会(経済) ４単位*4 現代社会(法政) 日本史Ｂ 地理Ｂ	自由選択　10単位*5

註）
＊１　立教池袋中学校・高等学校は、中１から高３まで各学年３クラスで編成されている。
＊２　選科とは、「選修教科」の略称で、立教中学校であった1976年度から実施しており、全教科が講座を提供している。
社会科も各学年４～６講座を開いている。一例を挙げると、中三で「現代史からの問い」、中二で「福祉とボランティア」などがある。
なお選科について詳しくは、拙稿「中学校で日本近現代史を教えて」（立教大学教職課程研究室『教職研究』第12号、2002年）を参照。
＊３　地理Ａ・数Ｂ・古典の３科目の中から１つを選択
＊４　以上４科目と理系２科目と全部で６科目の中から１つを選択
＊５　国語・地歴・公民・数学・理科・外国語の各講座（２単位）より５つ選択。
地歴・公民では６講座を開講している。
その講座は、「福祉」「法律」「政治史」「国際関係」「マーケティング論」「経済」である。

二に、六年間一貫教育の視点にたって、中学校でじっくりと前近代を学習し、高校では近現代を詳しく学習するというカリキュラム編成にしたためである。第三に、立教大学との一貫連携教育を意識したためである。多くの生徒は、立教大学の社会科学系学部（経済・法・社会等）に推薦入学することを考えている。こうした状況をふまえて、諸社会科学が分析の対象としてきた近現代社会について詳しく学習しておくことは、その学問体系の成り立ちを理解することに役立つのではないかと考えたのである。

一方、世界史と日本史と分野を分けなかったのは、近現代においては世界が一体化しており、世界の出来事が直接日本の動きにつながると考えたからであった。日本の近現代を見ていく場合、二〇世紀前半は東アジアとの関係から、また二〇世紀後半は世界的な冷戦のなかでアメリカとの関係から捉えることが必要であるとの認識からであった。[4]

一　授業内容の構成

高二で近現代史を実施することに決まっていたが、その詳しい内容は担当者に任されていた。私が最初の担当と決まり、授業の準備を始め、時数と内容を検討していくと、近現代史に絞るといっても、市民革命から詳しく進めていたのでは、二〇世紀後半まで到達できないことがわかった。そこで、思い切って二〇世紀の歴史に絞り込んだ内容にすることを社会科の会議に提案し了承を得た。こうして内容は、「近現代の世界史（日本史を含む）を、二〇世紀を中心に学習する」となり、年間計画では、「前期（一学期）…帝国主義の成立と展開、日本の近代化（一九世紀初頭から一九二〇年代はじめまで）」「中期（二学期）…戦間期の世界、第二次世界大戦、戦後世界の形成（一九二〇～四〇年代）」「後期（三学期）…冷戦体制の形成と展開、現代世界の動き（一九五〇～九〇年代）」を設定した。教科書は実教出版の「高校日本史B　新訂版」「高校世界史B　新訂版」、副教材は浜島書店の「新詳世界史図説」を使用することにした。[5]また、内容は必ずしも教科書通りに進まないので、レジメを作成し、それに内容の展開を詳述するとともに、日本史関係の史資料を掲載することにした。

さて、二〇世紀を中心とした授業内容を構成していくうえで、以下の三つの点に留意した。第一に、現在の世界に直接つながるシステム・価値意識・原理・問題点の形成と展開を重点的に取り上げていくことであった。すなわち二〇世紀の普遍的な原理となった「民族自決」「国民国家」「民主主義」「国際協調による平和の構築」などの考えが、どのような歴史的背景をもって形成され、どのような過程を経て、どの程度実現されて現在に至っているのか、ということを意識したのである。具体的には、「国際連盟と国際連合」「民族独立運動」「社会主義運動」「民主主義運動」などの人々の動き、「大量消費社会」「大衆社会」の諸特質、そして、これら原理・運動の大きな転換点となった二つの世界大戦の意義、について充分に時間を取れるようにした。

第二に、日本史の取り扱いで、その当時に様々な選択肢があったことを提示することである。近代日本の歩みは帝国主義国家への成長とアジアへの侵略であったが、その過程だけを学習していくと、日本が植民地にならずに独立を維持していくためにはそれ以外の道がありえなかったという思考に陥る可能性がある。しかし選択肢が存在したことを知ることで、実際の歴史とは異なった道のりについての可能性を考え、より相対化して捉えることができる。歴史において仮定の議論は意味のないことと言われるが、こうした学習は、指導者や国民の一つ一つの政治判断の積み重

ねによって歴史が形成されていくことを理解し、政治判断の重みを考察したり、現在の政治的事柄への自分の態度に引きつけて考えていくことにつながると考える。[6] そこで、日清・日露戦争、第一次世界大戦、日米開戦、戦後の講和などで、外交的選択肢を提示するようにした。

第三に、政治（法律）・経済・社会などの社会科学と実際の歴史の動きについてもできるだけ取り上げようとしたことである。例えば、大日本国帝国憲法の天皇機関説を詳しく取り上げて法解釈が現実の政治に与えた影響を学習する一方で、世界恐慌とケインズ経済学をある程度時間をとって取り上げることで、経済学が実際の経済とどのような関係を持ちつつ発展してきたかを学習するなどである。このことにより、高一において政経・倫理で学習した視角を実際の社会の動きの中で捉え、人間社会の多様な分野を総合的にとらえる視点を育成することを考えたのである。

人物をテーマにした学習については、充分な時間を取れないことが予想された。しかし、歴史における個人の生き様を学習することは、生徒自身の政治や社会への関わりを考えていく上でも重要なことなので、年五回提出させるレポートで取り上げさせるようにした。ちなみに、高校地歴公民科の評価は、年五回の定期テストの平均点に平常点を加算した基準点をもとにしてなされ、基準点が五〇点以上で合格となる。平常点は必修では共通しており、年五回のレポート、授業中の課題、自主的に行う自由課題の三つから構成され、全体で最大二五点を得ることができる。この平常のレポートで、一九～二〇世紀の日本や世界で活躍した政治家・思想家・学者など人物について取り上げるよう指示することを考えたのである。

こうした計画にそって授業を進めていったが、実際には表2に示した内容しか行うことができなかった。結果的に、第二次世界大戦の終了と国際連合の出発までで学年末を迎えることになった。戦後の歴史は、課題プリントと大まかな流れを示すビデオの視聴だけになった。これは、一九世紀について時間をかけてしまったことや、前述した三つの留意事項に時間をかけすぎてしまったためである。しかし、二つの世界大戦をカバーしたことにより、第一次世界大戦により生み出された諸原則（民主主義、民族自決権、国民国家システム、国際機構による平和の維持など）が、第二次世界大戦の結果、再確認されるとともにその普遍化がもたらされ、現代世界の基盤となったことを学習できた。また、戦前期日本の政策決定構造の特質と政治的選択の意味、国家と国民の関係についても詳しく学習することができた。

表２　2001年度　高校２年　日本史Ａ・世界史Ａ　レジメ目次

（前期）	（中期）	（後期）
第１章　帝国主義の成立と変容 １．帝国主義とは ２．産業革命 ３．自由主義･国民主義の進展 ４．ドイツ・イタリアの統一と東欧・ロシア ５．アメリカ合衆国の発展 ６．19世紀後半のヨーロッパ ７．インド・東南アジアの植民地化 ８．中国への侵略 ９．帝国主義の成立 10．アフリカ・太平洋・中国の分割 11．国際対立の激化 12．第１次世界大戦 13．ロシア革命 14．ウィルソンの「14か条の平和原則」 15．ドイツ革命と戦争の終結 16．ヴェルサイユ体制の成立 第２章　「大日本帝国」の形成 １．日本の開国 ２．安政の大獄 ３．開国後の経済変動 ４．公武合体と攘夷の実行 ５．大政奉還 ６．明治維新政府の出発 ７．中央集権政府の成立 ８．富国強兵政策 ９．文明開化 10．士族反乱 11．自由民権運動 12．私擬憲法 13．明治14年の政変 14．松方財政 15．政党の成立と激化諸事件 16．憲法の起草と政治制度の整備 17．大日本帝国憲法	18．新政府の近隣外交 19．日清戦争への道 20．日清戦争 21．日清戦争後の世界と日本 22．帝国主義体制下の東アジア 23．日露戦争 24．日露戦後の朝鮮支配 25．「満蒙特殊権益」の形成 26．辛亥革命 27．第１次世界大戦と日本 28．日本資本主義の成長 29．パリ講和会議と日本 30．ワシントン会議 第３章　ヴェルサイユ＝ワシントン体制下の世界 １．ヴェルサイユ＝ワシントン体制下の世界 ２．1920年代のアメリカ ３．ヨーロッパ各国の動き ４．国際協調と国際連盟 ５．三・一独立運動と五・四運動 ６．中国の国民革命 ７．インドの民族運動 ８．東南アジアの民族運動 ９．西アジアの民族運動 10．大正デモクラシーのおこり 11．大正デモクラシーの政治的展開 12．大正デモクラシー下の社会運動 13．大正デモクラシー期の文化 14．関東大震災 15．幣原外交と田中外交 16．世界恐慌 17．世界恐慌への対応 第４章　第２次世界大戦 １．満州事変 ２．「満州国」と国際連盟脱退	３．ファシズムの台頭 ４．人民戦線とスペイン内戦 ５．日本の軍部支配の進展 ６．日中全面戦争 ７．第２次世界大戦の開始 ８．日独伊三国同盟とファシズム体制の確立 ９．対米開戦への道 10．戦局の展開（アジア太平洋戦争） 11．「大東亜共栄圏」の実態 12．戦局の展開（ヨーロッパ戦線） 13．日本の敗戦 14．第２次世界大戦の構造

二　授業の方法

（一）ビデオ映像の多用

この授業ではビデオ映像を視聴する機会を多くし、授業方法の一つの柱に据えた。二〇世紀は初めて動く映像で記録された時代である。この時代が持つ特色を活かして、生徒の関心を高めることを意図したのである。また映像は視覚に訴え、時代のイメージづくりに役立つことから、複雑さを増した近現代社会に対する生徒の理解をたすけることになるとも考えたのである。[7]もちろん映像が持つ問題点に充分に配慮して解説を加えた。

利用したビデオの一覧は、表3に示した通りである。この中で、基軸にして視聴したものは、ＮＨＫスペシャル『映像の世紀』である。『映像の世紀』は、ほとんどの内容が当時の貴重な映像で構成されており、さらに時代背景の解説や世界に影響を与えた人物の回想や証言が織り込まれている。それゆえ、生徒にとって興味がわき理解しやすいものだと考えたのである。一集の時間は授業時間を越えるので、授業の内容と関係あるところを数回に分割して利用した。解説も加えるので、一回あたり約二〇～三〇分程度の時間を視聴にあてた。また社会科教室に据え付けられたプロジェクターによる大画面を利用し、生徒にとって見やすい環境を作った。特に集中して取り上げたものは、第一次世界大戦、一九二〇年代のアメリカ大量消費社会、一九二〇年代のアジアの民族運動、ヒトラーの台頭と第二次世界大戦である。

前期は、『映像の世紀』のほか、一九世紀の理解をたすけるため、教育放送が中学生向けに作成した番組を録画したビデオも併用した。中期から後期にかけては、テーマをもったビデオを見せて感想を書かせた。戦前期日本の問題点を浮き彫りにしているＮＨＫスペシャルの『ドキュメント太平洋戦争』[8]や、ＮＨＫ番組『その時歴史が動いた』などを使用した。このように多くのビデオを利用したので、おおよそ四回に一回の割合でビデオ映像を見る授業を実施したことになった。

（二）史料の利用

授業では、その内容をまとめたレジメを配布した。これは、前年度、高一で政経・倫理を担当した原真也教諭がとった方法を、私も引き継いだのである。日本史Ａ・世界史Ａでは、通し番号五〇番のレジメまで配布した。このようにレジメの枚数が多くなった理由に、主に日本史の重要な箇所について詳しい史料を添付したことがある。[9]詳しい史料を添付したのは、戦前期の日本を学習するにおいては、イ

表３　使用したビデオの一覧

NHKスペシャル『映像の世紀』
第１集　20世紀はこうして始まった
第２集　大量殺戮の完成
第３集　それはマンハッタンから始まった
第４集　ヒトラーの野望
第５集　世界は地獄を見た
第６集　独立の旗の下に

NHKスペシャル『ドキュメント太平洋戦争』
第２集　敵を知らず己を知らず　ガダルカナル
第５集　踏みにじられた南の島　フィリピン・レイテ

NHK番組『その時歴史が動いた　満州事変　関東軍　独走す』

NHK教育放送　『ステップ＆ジャンプ』
1993年度
列強のアジア進出　～アヘン戦争～
大日本帝国憲法発布
護憲運動
1994年度
総力戦と国民　～第１次世界大戦～
1995年度
インド大反乱　～イギリス支配～
日露戦争　～帝国主義への道～
1996年度
労働者・農民の蜂起　～ロシア革命の理想～
ヒトラーの独裁　～ファシズムの台頭～
冷戦　～核軍拡競争の中で～

メージや結論を重視した学習では不充分で、史料に基づいた実態認識を形成することが必要であると考えたためである。侵略戦争の実態、戦争にむけての国家意志の決定過程などについての学習は、これからの国家と個人の関係や平和社会を考えていくうえで極めて重要なものである。それゆえ自ら考え理解できるように、史料を提示することが必要なのである。[10]

具体的には、「満州事変と満州国の実態」「石橋湛山の小日本主義の主張」「華北分離工作」「日中戦争の全面化と南京大虐殺」「日独伊三国同盟」「対米開戦への道」「東南アジア占領政策」などで複数の史料を掲載した。なかでも「対米開戦への道」では、日本政府・軍部の政策決定構造の問題点を明らかにするために、十個の史料を提示し、時間をかけた。一九四一年九月の「帝国国策遂行要領」・十一月の軍事参議院参議会における永野修身軍令総長の戦争

終結の見通し・一〇月一二日の五相会議の会談内容（以上は稲葉正夫ほか編『太平洋戦争への道』別巻資料編、朝日新聞社、一九六三年）、「対英米蘭蒋戦争終末促進ニ関スル腹案」（参謀本部編『杉山メモ（上）』原書房、一九八九年）、東条英機内閣成立の経緯（『木戸幸一日記』下巻、東京大学出版会、一九六六年）、近衛文麿の回想（近衛文麿「平和への努力」、富田健治『敗戦日本の内側』）、軍部中堅幕僚の考え（軍事史学会編『参謀本部戦争指導班　機密戦争日誌』錦正社、一九九九年）などを載せた。これらの史資料は、授業時に生徒に読んでもらい、解説を加えた。

（三）生徒による発表

授業では、講義だけでなく、生徒による発表も取り入れた。ねらいには、生徒の主体的な取り組みを促すこととともに、大学のゼミ形式の授業にむけた準備もあった。形式としては、教員があるテーマについて調べて発表する生徒を募集する、募集に応じた生徒は、教員の指導を受けてテーマについて調査し、その調べた内容をレジメ一枚にまとめてクラスの生徒全員に配布し、おおよそ一〇～一五分で発表して質疑応答を受ける。そして発表に対する評価は、自由課題点として加点されるというものである。当初は、学期に一回ずつ、発表の機会を設けようとしたが、授業の進度の関係から後期は実施できず、二回しか行えなかった。

まず前期には、「第一次世界大戦時のイギリス・フランス・ドイツの国内体制の比較」ということで、それぞれの国を担当する各クラス三名の募集をした。三名の応募があったクラスと二名しかいなかったクラスがあったが、足りない所は他のクラスの生徒の発表レジメを利用して、一時間で三国の状況の発表をしてもらった。そして次の授業で、その発表をもとに、私の方で比較し、共通する点と異なる点を指摘し、その原因や第一次世界大戦がもたらした総力戦体制の諸特徴を学習した。中期は、「国際連盟の紛争処理」というテーマで、これまで後の国際連合との比較で機能の弱さだけが強調されてきた国際連盟が実際の国際紛争にどのように対処したのか、その実例を報告してもらった。このときは一名で実施した。

三　生徒の感想

この一年間の授業の終わりに、「授業から学んだこと」「授業の内容や方法について」の二項目について、生徒に自由に感想を書いてもらった。そのいくつかを以下に載せたい。

①授業内容から学んだことについて

・今年度、帝国主義の時代という事を一年間やった事で歴

史を勉強していく意味を学んだ気がする。現代世界で起きている問題点を表面だけ見るのではなく、問題点が起きた歴史を学ぶことで、これからどうしていくべきなのかがわかるという事を学んだ。そして国家と国民の関係の難しさ、戦争、国家システムなどを多角的に考える姿勢を学んだ。

・過去の国際関係を学ぶことによって、現代に起こっている国際問題をひもとくことができた。また日本の世界的地位の変化についても学んだと思う。数々の戦争を通して当時の日本政府の考え方や日本軍の許されるべきでない非人道的行動を学んだ。

・数々の戦争を経験してきた世界は、戦争の恐ろしさを知っている。どの国も平和を目指そうとする世の中になったように見える。しかし二〇世紀半ばまでの勢力争いの後のしがらみのようなものがあると思う。この二つの間にある現代の世界は不安定であるにちがいないと思った。

・第二次大戦の時にもあったように、世界は常に次の時代を考えていかなければいけないと思う。そのために歴史があるのだと思うし、過去を美化しすぎて同じことを繰り返すのは危険だと思う。歴史をふり返り、そこから次の時代を考え、切り開いていかなければならないと思う。

・世界史では帝国主義国家による植民地支配から、それを原因とした第一次世界大戦、しかしこの教訓が活かされずに発生してしまった第二次大戦と戦後の平和な時期まで学んだ。日本史では、明治から大日本帝国による帝国主義時代、天皇を中心とする軍拡と侵略の歴史までを学んだ。どちらも現代世界を形成するのに大きな影響を与えたわけであるが、やはり人間は歴史上の数々の失敗を乗り越え、多くの事を学び、進歩していっていることがわかる。そして今も、人間は進歩し続けているのである。僕達の未来がより良きものになるよう、歩んでいかなくてはならない。

・各国間の対立、戦争に至る過程を学び、人類は様々な失敗（同じ人類同士の殺戮、他国の強制的な支配など）をくり返し、それにより国家として、また国民として、さらにはそれぞれ一人の人間としての思想、正しい人類のあり方、そういったことを研ぎ澄ませてきたのだと感じました。また、それを学ぶことにより同じ失敗を繰り返さないようになる、それがいかに大切か感じました。

②ビデオ映像の多用について

・授業で学んだことを映像でまとめることによって学習の効率が上がって、自分としてはわかりやすかった。映像によってその当時の戦争の恐ろしさを強く感じることができた。

・「映像の世紀」は、とても興味深く見せてもらいました。他のビデオよりも音楽と映像のコラボレーションが良く、長い間使われるビデオになると思います。
・ビデオで実際に昔の映像を見ることは、すごく良かったと思います。特に戦争の様子や人々の様子を知るには非常に効果的でわかりやすいです。

③レジメ・史料の利用について
・レジメの量が多かった。資料と流れを別のプリントにすると見やすいと思う。
・今まで読んだことのない資料が多かったので興味深かった（軍人の日誌とか）です。

④発表について
・有志による発表は初体験であったが、とても新鮮でよかったと思う。このような双方向の学習もいいことだと思う。
・時間があればもっと多くの発表をやったほうがいいと思う。最初の授業で、一〇人ぐらい「くじ」などで決めるなど。
・生徒による発表は詰めが甘いと感じる所もあったが、先生の授業とはまた違った観点から物事をとらえる説明をしてくれて、おもしろかったと思う。

四　考察と今後の課題

ここでは、生徒の感想をふまえて、今後の課題を考えていきたい。授業内容から学んだことについて、生徒の受けとめ方は様々であるが、前節で載せた六人の生徒の感想のいずれかに近い内容のものが多く見受けられた。人類が世界戦争という悲惨な出来事を経験するなかで、その反省から平和と民主主義を実現してきたことを理解し、今後の社会でもその方向をさらに進めていく努力が必要であるという認識、すなわち過去の過ちと優れた点をしっかり学んで平和な未来をつくるために活かすといった内容に関する言及が多かったのである。また、現代の問題点を歴史的に捉えていくことの重要性に関連した言及も多かった。これらの感想を見ているかぎり、歴史学習のねらいの一つである《現代の世界がどのような歴史的過程を経て形成されてきたかを学び、現代世界が直面している課題を相対化してとらえ、解決する思考力を養う[11]》ということは、概ね達成できたように思う。そして、今回、二〇世紀に絞って詳しい内容を学習したことが、歴史学習に対する生徒の課題意識を明確にし、このような感想につながったと感じた。また、これらの感想を読むにつけて、第二次世界大戦後の歴史を充分にできなかったことが悔やまれる。現在まで直接つな

げることができたならば、生徒の認識はさらにはっきりしたであろう。実際、戦後史をもっと学習したかったという感想も少なくなかった。授業内容の構成に留意しつつ、時間配分について抜本的な再検討が必要だと考える。

次に授業の方法について、生徒の感想を見ると、ほとんどが当時の記録を中心としたビデオ映像を多く視聴したことはよかったと述べている。特に、『映像の世紀』は好評であった。その理由を生徒の感想から探ってみると、第一に理解しやすいという点が挙げられている。言葉や文字ではイメージしづらいことを補ってくれたとしている。ある生徒は「教科書で勉強していても、その時代の様子を想像し得ないところがあるが、二〇世紀は映像の世紀なのでその映像を見れば理解しやすい」と記している。第二に、強い印象として定着したという点である。ある生徒は、映像が「テストの時、頭の中によみがえって」きたと感想に記している。戦争については、その悲惨さが印象に残り、「いかにダメな事なのか、実感することができ」たという感想が多かった。第三に、新たな発見があって、興味が湧いたという点である。今の生活スタイルとの違いなど文化面での事柄が、面白かったという感想があった。以上のことをふまえると、映像記録を多用したことは、二〇世紀を学習する上で効果があったといえよう。今後は、この三つの特色をより自覚して、その利用方法をさらに考えていく必要があると思う。

史資料を多く利用したことは、色々な視点から事柄をとらえることができてよかったという感想がある一方で、多すぎて混乱したり、定期テストのときに大変であったという感想も多かった。また、世界史と日本史をつなげて授業を展開したことについても、「日本史と世界史がまざっているのは、やっている最中は大変だが、終わってみると日本と世界との差や時代別に何がおきたのかがよく分かった」という感想に表れているように、関連が理解できてよかったという反応の一方で、混乱し理解することが大変だったということがあったようである。こうした混乱を避けるためには、様々な歴史的事象を整理して、流れの中に位置づける作業が必要である。昨年度は授業中の指導において意識し、またそのための課題プリントも作成したが、今後も充分に配慮して指導していきたい。

生徒による発表については、生徒の感想は好意的で、もっと実施してほしいというものが多かった。歴史の教科内容において、四〇名以上のクラスの人数で、講義形式と異なる授業を実施することはなかなか難しい。それだけに、発表をした者にとっても、聴いた者にとっても新鮮な経験であったようだ。発表する側は自分なりにしっかりと理解し

ていなければ説明できないということがわかったようである。生徒同士の発表ということで、質問も気軽に出てきたし、問題の本質にふれる「なぜ」が出てくることもあった。事前の指導などに多くの時間を費やすことが多いが、回数を増やすように努力していきたい。

おわりに

私は二〇〇二年度も高二の日本史A・世界史Aを担当している。前節で記した課題を意識して授業を進めてきている。現在、前期を終了した段階だが、日本史を大日本帝国憲法から始めるなど一九世紀の学習内容を大幅に短縮して、進度目標の一九二〇年代まで進んできた。計画通り学年末に冷戦の終結まで進むように、計画を再度点検する予定である。また生徒による発表の機会も増やした。今学期はすでに二回行い、各クラス五名の生徒に発表してもらった。昨年同様の第一次大戦の各国比較（三名）と、今年度新たに設けた「朝鮮と台湾における日本の植民地支配の比較」（二名）である。その場では、活発に質問が出された。中期以降も、学期に二回の発表を考えている。

今回、このように授業実践の記録をまとめて報告する機会を得て、各単元の設定、そこでのねらいや留意事項、時間配分、授業方法について、これまで以上に課題を明確にすることができた。今後も近現代史教育が持つ意義と方法について考え、実践に活かしていきたい。

註

（1）立教池袋中学校・高等学校は、二〇〇二年度になり、中一から高三までの六学年全部が揃った。各学年は三クラスで定員は一三二名である。本稿と関連する、中学校における実践報告については、拙稿「中学校で日本近現代史を教えて」（立教大学教職課程研究室『教職研究』第一二号（二〇〇一年度）、二〇〇二年三月）でまとめている。

（2）ちなみに、二〇〇二年度の中学校社会科および高校地歴・公民科の教員は、専任が五名、非常勤講師一名の六名により構成されていた。

（3）一九九〇年代に入り、毎年「戦争体験者の話を伺う」機会を設けてきたが、なかでも一九九五年には、「戦後五〇年を考える」シリーズとして、年五回のプログラムを用意し、元ひめゆり学徒隊の方のお話や、ガダルカナルで激戦を経験し捕虜となった元公務員の方のお話などを聴いた。これについては、「社会科企画　実践記録　『戦後五〇年を考える』シリーズ」（『一九九六年度立教中学校教育実践録』立教中学校）に詳細な報告が載っている。

（4）私としては、世界の動きの中で日本を捉えることにより、日本の動きの意味を理解しやすくなり、相対化して捉えることができるのではないかと考えた。特に、日本の十五年戦争については、その加害の事実を知るとともに、世界史におけ

る位置づけを意識して学習することが必要であると考えている。この歴史的意義付けについては、木村靖二『二つの大戦』（世界史リブレット四七）山川出版社、一九九六年や、木畑洋一『第二次世界大戦』吉川弘文館、二〇〇一年などを参照した。最新のもとしては、伊香俊哉『近代日本と戦争違法化体制』吉川弘文館、二〇〇二年が出ている。

(5) 教科書については、「日本史A」「世界史A」用の教科書もあったが、高三で日本史Bを選択する可能性があることや、詳細な内容を取り上げることなどから、「日本史B」「世界史B」（それぞれ四単位）用の教科書を使用することにした。

(6) この点については、以下の論考から大いに示唆を受けている。目良誠二郎「日清戦争をめぐる歴史の選択肢と歴史学・歴史教育」（比較史・比較歴史教育研究会編『黒船と日清戦争』未来社、一九九六年）。岩井忠熊『大陸侵略は避け難い道だったのか』かもがわ出版、一九九七年。

(7) ビデオ映像利用については、前掲、拙稿「中学校で日本近現代史を教えて」においても考察したので参照されたい。

(8) この番組については、出版化され、角川文庫に入っている。NHK取材班編『太平洋戦争　日本の敗因』一巻〜六巻、角川文庫、一九九五年。

(9) 歴史学研究会編『日本史史料［5］現代』岩波書店、一九九七年などを参照した。

(10) この点については、山田朗『歴史修正主義の克服』高文研、二〇〇一年を参照した。

(11) この文章については、教科書（鶴見尚弘ほか編『高校世界史B　新訂版』実教出版、二〇〇一年度版）の「はじめに」を一部変更して作成したもので、一枚目のレジメに載せて、授業の最初の時間に生徒に説明したものである。

〔付記〕本稿の作成にあたり、立教大学文学部助教授の奈須恵子先生に、原稿の段階で目をとおして頂き、貴重なコメントを頂いた。記して心から感謝の意を表する次第である。

（立教池袋中学校・高等学校教諭、本学非常勤講師）